

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：53801

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820072

研究課題名(和文)文化プロテスタンティズムに対する第一次世界大戦の影響についての思想史的研究

研究課題名(英文) Intellectual historical research on the influence of the World War I on the Cultural Protestantism

研究代表者

小柳 敦史 (KOYANAGI, Atsushi)

沼津工業高等専門学校・教養科・助教

研究者番号：60635308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドイツの「文化プロテスタンティズム」と呼ばれるリベラルな神学者たちに第一次世界大戦が及ぼした影響を思想史的意義の観点から明らかにしようとするものである。大戦以前から活躍していた旧世代の神学者と、戦争後の思想界に新たに登場してくる新世代の神学者それぞれが、大戦の経験とその後の社会の構想をどのように語っているかを、単純な世代論に終始することなく描き出すことを目指した。その成果として、これまでの先行研究で設定されていた世代間の断絶の構図では抜け落ちてしまう、旧世代に属しながらも新世代の思想に理解を示し、思想的遺産の継承を図る立場の存在を明らかにし、その立場を神学的「後衛」と特徴づけた。

研究成果の概要(英文)：This research aims at shedding on the influence of the World War I on the theological thoughts of the so called "Cultural Protestantism". For that purpose, this research analyzes how the theologians belonging to the old generations who had already acted before the War and the younger theologians who came on the intellectual world demonstrated their thought about the War and the design after the War.

It is the feature of the research is to avoid the naive generational arguments. I characterize the theologians as "arriere-garde" who war belonging to the old generations but shared the interest of the young generations. There is the strong possibility that the concept of "arriere-garde" can bridge the gap between the old and young generations or the conservative and the liberal thinkers.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：キリスト教思想史 文化プロテスタンティズム 第一次世界大戦 前衛/後衛 エルンスト・トレルチ

## 1. 研究開始当初の背景

「文化プロテスタンティズム」という言葉はながら、世俗的な価値観と妥協して墮落したキリスト教のありかたを示すレッテルとして機能していたが、1980年代以降はむしろ文化プロテスタンティズムに含まれる神学者たちの思想が神学外の学問や社会への関わりに関かれた性格を持つことが再評価され、その研究は「シュライアマハー・ルネサンス」や「トレルチ・ルネサンス」と呼ばれるほどの活況を呈するようになった。その中でもミュンヘン大学のF. W. Grafを中心とするグループはキリスト教思想を一般的な社会・文化史との密接な関連の中で解釈する方法論により優れた研究成果を産み出している。

このグループの比較的最近の代表的な業績はA. Christophersen のKairos (2008)である。また、わが国でこの方法論を採用したのものとしては深井智朗『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』(2009)が挙げられる。この両著作は、前者がバイエルン科学アカデミーのマックス・ヴェーバー賞、後者が日本ドイツ学会奨励賞に選ばれるなど、評価の高い優れた研究であるが、それゆえに現在の研究の不十分な点も明らかになる。対象としている時代順に後者からその内容を説明する。

深井の著作ではヴィルヘルム帝政期に活躍した文化プロテスタンティズムの神学者たちのリベラルな発言が、いかに帝国のナショナリズムに貢献するものであったかが明らかにされている。一方、Christophersenの著書が対象とするのは、深井が対象とした神学者たちに反旗を翻した若い世代の神学者たちの思想である。1880年代生まれの世代は「子の世代」(P・ゲイ)や「フロント世代」(D・ポイカート)と呼ばれてきたが、近年では「神学的アヴァンギャルド」とも呼ばれている。この世代の神学者たちが「カイロス」という概念のもとで反歴史主義的な思想を展開する様子をChristophersenは詳述する。

古い世代の文化プロテスタントから神学的アヴァンギャルドたちが離反する契機となったのが第一次世界大戦であったことは、広く認められているいわば定説であり、深井とChristophersenの著作はその前/後に関する現時点での到達点というべき業績である。しかし、これまでの研究ではこの前/後の切れ目に位置する第一次世界大戦がどのように経験されたのかについて明らかにされてきたとは言いがたい。第一次世界大戦はその前後で大きな転換が起こる、キリスト教思想におけるブラックボックスのように扱われてきたのである。本研究はこのブラックボックスの内部に光を当てるものである。これまでの研究ではあたかも第一次世界大戦を機に一挙に世代交代が起きたかのような

構図が描かれてきたが、実際には古い世代の神学者たちも短くとも第一次世界大戦後数年、長い場合には10年以上活躍を続けたのであり、彼らの思想に第一次世界大戦の経験がどのように反映されたのか、あるいはされなかったのかは明らかにされるべき事柄である。

また、1880年代生まれの若い世代の全員が最初から神学的アヴァンギャルドであったわけではない。むしろ彼らは文化プロテスタンティズムの一員であり、第一次世界大戦を機に一部の者が離反していったというのが正確なところである。古い世代と若い世代の神学者たちにとって第一次世界大戦がどのように経験されたのかを明らかにすることで、これまでの研究では当然の前提とされてきた世代間の断絶という構図の内実に向ることができる。

第一次世界大戦については、わが国では京都大学人文科学研究所が大規模な研究班を組織し、研究成果を集積しており、その成果の一端は人文書院から『第一次世界大戦レクチャーシリーズ』として出版されている。この研究班では第一次世界大戦の社会史的・文化史的意義を重視しているが、当時の社会に一定の影響力を及ぼしていた、宗教については手がつけられていない。本研究により、わが国における第一次世界大戦研究の空白を補うことができるものと見込まれた。

## 2. 研究の目的

本研究は、ドイツの「文化プロテスタンティズム」と呼ばれるリベラルな神学者たちにとって第一次世界大戦が及ぼした思想史的意義を明らかにしようとするものである。本研究により、1980年代以来活況が続いているヴィルヘルム帝政期からヴァイマル期ドイツのキリスト教思想研究における間隙に新たな光を当てるとともに、開戦百年が近づきその世界史的意義の再検討が進みつつある第一次世界大戦研究に対してキリスト教思想研究から貢献することを意図している。

## 3. 研究の方法

本研究はそのために、神学的テキストを歴史的・社会的コンテクストへの応答として読み解くことを目指す「神学史的方法」により、文化プロテスタンティズムの神学者たちに第一次世界大戦が与えた影響を考察する。

その際、神学者たちの布置を描くための分析概念として、フランス文学研究で注目されつつある、「前衛/後衛」という分析概念を使用している。これは、従来は「前衛=アヴァンギャルド」にのみ向けられていた視線を、「後衛」を自認する文学者へも向けることで、断絶ではなく連続のうちに19世紀から20世紀の文学史を再構築しようとする試みであり、[W. Marx2005]が先鞭をつけ、日本でも論文集[塚本昌則・鈴木雅雄編2010]が出版されるなど関心が高まっているものである。

この概念をドイツのプロテスタントイズムに援用することで、これまでは世代間の断絶として描かれてきた 20 世紀前半のキリスト教思想史をより精密に議論することができる。

#### 4. 研究成果

本研究により、第一次世界大戦前後の時代のドイツ・プロテスタント思想史の流れについて、宗教史学派に属する神学者については神学における「前衛」から「後衛」へと立場を移す過程として、弁証法神学など新しい世代の登場については「後衛」に対する「前衛」的神学思想の表明として理解することの有効性が示された。このような神学思想史的分析を導入することにより、本研究以前から研究代表者がその思想研究に従事していた神学者エルンスト・トレルチの思想について、論文「神学的方法によるエルンスト・トレルチ思想研究 歴史的思考の意味を中心に」を執筆し、京都大学から博士学位(文学)を得た。以下、この学位論文全三部(十章)の概要を記す。

第一章では、世紀転換期のプロテスタント神学界に「前衛」として登場したトレルチの姿を確認した。その前衛性は歴史的方法の徹底的な適用にあったが、そこでは、歴史的方法によるキリスト教の研究こそ、危機に瀕している人格性を救出する手段だと考えられていたのである。その際、歴史的方法が従来の教義学的方法に対する批判として機能すると同時に、歴史的方法によって見いだされる宗教の役割も、他の文化的価値に対する批判的機能にあるとされている。そして、そのような関係にあるのは、歴史的方法による思考態度は、キリスト教的な宗教性に起源を持つ、人格性を前提としているからであることを指摘した。

第二章と第三章では、歴史的思考がトレルチの思想において、どのような位置を占めているかを考察するため、トレルチの思想体系の評価と再構成を試みた。第二章では「体系」を含むとされた論考「倫理学の根本問題」の分析を行い、このテキストだけから「体系」を再構成することはできないが、経験的=歴史的世界に開かれた性質をその「体系」は持っており、それがすなわち根本的に倫理的な姿勢だと考えられていることを明らかにした。

第三章ではトレルチにおける「本質」概念の四つの側面「抽象概念」、「批判」、「発展概念」、「理想概念」と、トレルチの体系を構成する四つの学問分野「宗教心理学」、「宗教認識論」、「宗教の歴史哲学」、「形而上学」が基本的には対応しつつも入れ子構造を持つものとして整理した。つまり、トレルチにおいて「本質」は多元的かつ動的な性格を持ち、歴史に対する応答の中で見いだされ、追究されるものなのである。

第四章では、トレルチの思想体系の中心に

位置づけられる「宗教的アプリオリ」という概念が、歴史への応答を可能にし、共同体形成を可能にする役割も担っていることを、当時の論争状況との比較の中から明らかにした。「宗教的アプリオリ」は、直接的にはリッチェル学派による排他的なキリスト教理解に対する批判に理論的根拠を与える役割を果たしたが、既存の教会ではない、新たなキリスト教共同体の形成の基礎論となりうる内容を持っていたのである。

第二部では、第一次世界大戦勃発を契機とする社会的な変動や学問の変革のうねりと対峙するトレルチの姿を論じた。第五章では、第一次大戦中のトレルチが展開したナショナルリスティックな発言の内容を、そこで重要な意味を持つ「自由」の理解との関連から分析し、トレルチにおいては「ドイツ的自由」が「イギリス的自由」や「フランス的自由」と対置され、「ドイツ的自由」こそが真なる自由であり、その担い手だからこそドイツ性が称揚されるという、「自由」理解にもとづくナショナリズムがあることを明らかにし、その姿勢を「リベラル・ナショナリズム」と特徴づけた。そして、その発想は戦時という時局に迎合した、一時的なものであるわけではなく、彼の『信仰論』から『社会教説』までを貫く、「献身としての自由」という思想に由来するものであることを明らかにした。もちろん、この思想には献身の対象に対する批判的選択が無ければ容易に全体主義へと滑り落ちる危険性を持っている。第一次世界大戦開戦当初のトレルチは、その危険性に対する警戒心は低かったと言わざるをえない。しかし 1910 年代後半になると、トレルチは保守的言説の流行に対して警戒心を露わにする。その考察は第三部の課題となった。

第二部の残りの二章では、第一次世界大戦の敗戦を機に巻き起こった、学問の変革を求める声に対してトレルチがどのように応答したのかを検討した。第六章で論じたのは、アカデミズムの幅広い領域を巻き込んだ、「学問における革命」に対するトレルチの診断であった。M・ヴェーバーが『職業としての学問』で示した冷徹な学問観に対して、主としてゲオルゲ・クライスに属する若い学者たちが猛烈な反発を示した。トレルチはこの「革命」の要求に一定の真理契機を認めながら、古き学問の遺産を引き継ぐ必要性を訴える。トレルチが若者たちの要求に同意するのは、学問と人間の生を結び付けようとする姿勢である。専門化し、細分化していく学問が生全体性から乖離してしまうなら、生の全体を語りうる「哲学」が必要になる。しかし、生の全体性の中には、これまで学問が担ってきた「合理的思考」も含まれるはずである。生を掴み取るために合理的思考を放棄してしまえば、生の全体性をつかみ損ねることになってしまう。ゲオルゲ・クライスのように、形骸化した学問の中に、詩的なインスピレーションなどによって無理やり生を注入する

のではなく、生の多様な営みの中に学問があることを認識し直し、生のさらなる形成にとって学問がどのような貢献ができるのかを考えようとするのが、トレルチの姿勢であった。

その頃、プロテスタント神学の内部でも、若い世代の神学者から、神学の刷新を求める声が高まりつつあった。トレルチはここでも若い世代に共感を示しつつ、それまでの神学から引き継がれるべきものを擁護しようと試みる。第七章ではその様子を確認した。若い神学者たちは、第一次世界大戦の前線で銃をとった「前線世代」であり、当時の芸術などとの精神的つながりも認められるため「神学的前衛」と呼ばれてきたが、それに対して本研究では、若い世代から批判される古い世代に属しながらも、若い世代の問題意識を理解すトレルチを、「神学的後衛」と位置付けた。かつてはリッチェル学派や保守的ルター派に対する「前衛」だったトレルチが、いまや後衛戦を戦っているのである。神学的後衛としてのトレルチの戦いもまた、歴史的思考をめぐるものだった。しかし、それは批判の道具としての歴史的思考ではなく、社会と宗教との接点としての歴史的思考、あるいは共同体形成の基盤としての歴史的思考であった。

第三部では、そのような、未来へと向かい共同体を形成してゆく基盤となるべき歴史的思考が、いかにして可能になるとトレルチが考えていたのかを明らかにすることを目指した。第八章でそのための参照項としたのが、「保守革命」と呼ばれる知的動向だった。ゾンバルトやシュペングラーらの保守革命論者たちは、恣意的な歴史の利用により「ドイツ性」の意味を「ロマン主義」的なものへと切り詰め、その切り詰めたドイツの原理の上にドイツ国家を建設することを目指していたのだった。それに対してトレルチの構想は多元的なものだった。歴史的思考を真摯に遂行すれば、ある歴史現象に流れ込むいくつかの歴史的文脈が見えてくる。そういった複数の歴史的コンテクストの総合として現在はあり、その上に未来は形成される。それぞれに「個性」を持つ歴史的存在者を結びつけることが、歴史的思考の役割なのである。かくして、トレルチは「歴史的教養(die historische Bildung)」が「共同体形成(Gemeinschaftsbildung)」を可能にすると主張する。

第九章では、これまで扱ってきた「学問における革命」や「保守革命」などの運動が生み出された同時代の状況について、広い射程からトレルチが論じている論考「コンサバティブとリベラル」の内容を分析した。そこでトレルチが取り出してくる根本的な思想的対立は「合理主義」対「非合理主義」という図式であった。この図式が政治的含意を帯びると、端的な事実性を尊重する「コンサバティブ」と、普遍的な理念を追求する「リベラ

ル」との対立として現れてくるのである。たしかに、「学問における革命」や「保守革命」、あるいは「神学的前衛」においても、西洋近代の合理性に対する異議申し立てとしての「非合理主義」が主張されていたのだった。それに対して、両者の総合がトレルチの歩もうとする道である。その道のりについて、歴史哲学的に思索を深めたのが、大著『歴史主義とその諸問題』であった。

そこで我々は第十章で、『歴史主義とその諸問題』の結論部で提示される「構成の理念」について検討した。それはまた、「歴史によって歴史を克服する」という有名なテーゼの解釈をめぐる考察でもあった。その結果として明らかになったことは、「構成の理念」は「普遍史」から「現在の文化総合」へと橋渡しをする役割を果たしているが、それ自身は「普遍史」の問題圏に属しているということだった。このことは、「後衛」としてのトレルチにとっての歴史的思考の意味を考えれば納得のいくことである。なぜなら、「現在の文化総合」は現在の生の要求に従って未来の生の形成を求める、反歴史主義的、あるいは非合理主義的な敢行を核心に持つものだからである。「現在の文化総合」が歴史的に考えて妥当なものであるには、歴史の流れから(トレルチにおいては限定された意味ではあるが)普遍的な理念を取り出す「普遍史」的考察に基づかなければならない。非合理主義と合理主義の総合がトレルチの目指すところであるとは言え、トレルチの足場は合理主義の側、あるいは古き学問の側に残っている。歴史がもたらした問題を歴史的思考によって克服したうえで、新たな形成の土台を提供することが「構成の理念」が意味するところである。それは、生に対する新たな要求をもたらす非合理主義的な若い世代＝前衛たちに、合理性を持つ歴史的思考によって引き継ぐべき理念を整理するという、歴史哲学における後衛としてのトレルチの戦いであったと言えるだろう。

以上の研究成果は、まずエルンスト・トレルチについての専門研究として、トレルチ思想の全体像について見通しをつける試みとして近年では国内外を問わず貴重なものである。

次に、第一次世界大戦期の思想・文化研究に対して新たな光を投げかける可能性がある。第一次世界大戦については「研究の背景」で触れた通り多くの研究成果が発表されつつあり、本研究期間に開戦百周年を迎え、その動向はなお活発である。これらの研究において第一次世界大戦が現代世界に対して持っている多面的な影響が明らかになっている。そこで、次に解明すべき研究の重点は対戦そのものから、大戦の終わらせ方、あるいは終戦という事態がもたらした影響へと移ってきていると思われる。そうした関心に対して、本研究が分析概念とした「前衛/後衛」という視点は大きな貢献をなすことができ

るはずである。

そこで今後の展望としては、本研究で「前衛/後衛」という視点から整理した神学思想と、終戦の迎え方および受け取り方の関連を解明していきたい。その際には、「動員 Mobilmachung」と「動員解除 Entmobi lmachung」という語がキーワードになると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

小柳敦史、神学史的方法によるエルンスト・トレルチ思想研究 歴史的思考の意味を中心に、課程博士論文(京都大学)、2014、1 - 160

小柳敦史、ドイツ・プロテスタンティズムにおける前衛と後衛、基督教学研究、第 33号、2013、印刷中

[学会発表](計 2件)

小柳敦史、トレルチにおける歴史的思考の二つの役割 前衛から後衛へ、京都大学基督教学会第 13 回研究発表会、2014 年 12 月 13 日(発表確定)、於京都大学

小柳敦史、E・トレルチと W・ブセットにわたっての第一次世界大戦、日本宗教学会第 72 回学術大会、2013 年 9 月 8 日、於國學院大學

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小柳 敦史 (KOYANAGI, Atsushi)

沼津工業高等専門学校・教養科・助教

研究者番号：60635308